

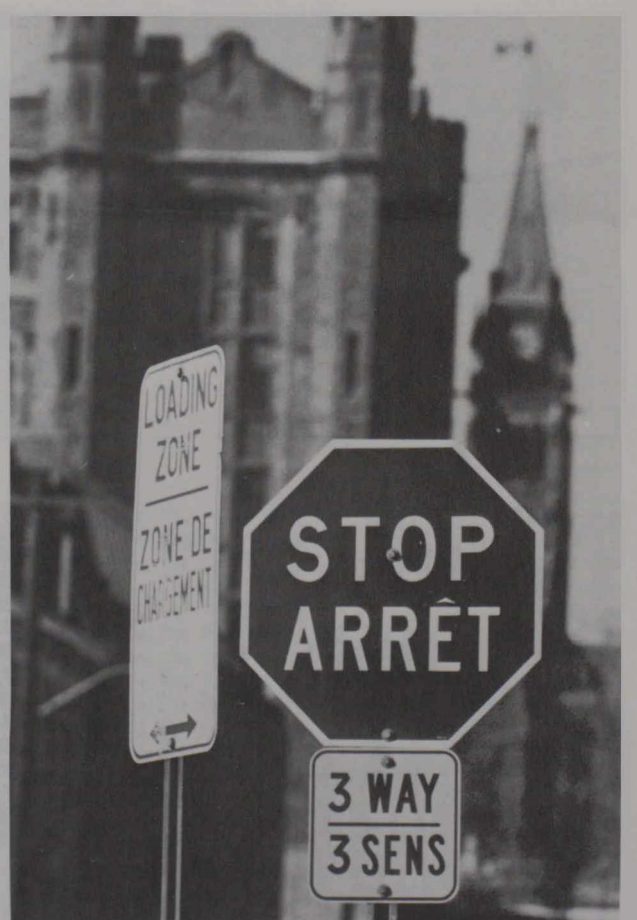
が、多数派の英語系住民は一八九〇年、単一の言語、単一の公立学校制度を採用し、これまでの二重構造に終止符を打った。サスカチュワン州とアルバータ州が一九〇五年に創設されたが、そこでも同じことが繰り返された。一九二〇年代に入って、少数派のフランス語住民に対していくらかの教育権を与えていたオンタリオ州も、二言語制学校の拡大を制限する措置をとった。

🍁 続いて一八八五年、西部カナダで二回の反乱を指揮したメティス（フランス人とインディアン混血で、フランス語を話す）のルイ・リエルを処刑することが決定された。リエルは反逆罪に問われていたが、精神的に不安定だということとで情状酌量を求める声もあった。多くのフランス系カナダ人がリエルの動機に同情していたにもかかわらず、連邦政府当局は絞首刑の実施を許可した。こうすることが、明らかに多数派の英語系カナダ人の意思であった。第一次世界大戦は、海外派兵のための徴兵問題に関して、さらに深刻な文化的衝突を招いた。もともと孤立主義で、英国系カナダ人が自分たちの言語権を認めたくないことに業を煮やしていたフランス系カナダ人は、徴兵政策に反対した。一方、戦争について英帝国寄りだったほとんどの英国系カナダ人は、徴兵を強く支持した。結局、多数派の意見が通り、多くのフランス系カナダ人は連邦政治における自分たちの力が見せかけだけのものに過ぎず、自分たちの将来を保障するのはケベック州を強化するしかないことを確信した。

🍁 一八八〇年代から今日まで、ケベック州の指導者たちは州政府と中央政府

府の権限分与を厳密に解釈することに固執してきた。州の政治家たちは、しばしば、中央政府より州の方が優位だと主張したほどである。ケベックだけが州の自治を云々したわけではない——事実、最初に自治を主張したのはオンタリオ州であった。そのことは確かに重要であるが、文化的に特異なケベックには、そういう立場をとるだけの特別な理由があったのである。州権と州の優位を主張する人たちは、連邦制度は諸州間の「契約」により、一定の権限が中央政府に委譲されてきたものだ、とこれまで論じてきた。契約論者たちの主張によると、諸州の同意なしにこれらの権限を変更することはできない。

🍁 連邦政府の権限縮小を要求する声は、第一次世界大戦の終結とともに、ケベック州や、時には他の州からもひんぱんに聞かれるようになった。これには二つの理由がある。ケベック以外における少数派のフランス語系住民が遭遇した不幸な体験と戦時中の文化的衝突がひとつ。カナダ社会における政府の役割に対して見方が変わってきたことが第二の理由である。戦争をはさんでカナダがだんだんと都市化、工業化していくにつれ、連邦政府は社会保障や教育、文化、経済管理などの分野においてもっと大きな権限をもつべきだ、と国民の多くは考えた。大恐慌でいくつかの州が倒産状態に直面すると、国民経済に対する権限と広範な課税基盤、それに裕福な地域から恵まれた地域へ富を再分配する能力を有する連邦政府は、福祉国家的役割を果たすようになった。連邦政府はフランス系カナダの利益に不利な政策を採用するのではない



英仏両語の交通標識。ケベック市の街角で。

かといつも危惧していた（実際には、フランス系カナダ人は連邦政治において大きな役割を果たしていた）歴代ケベック州政府の抵抗にもかかわらず、連邦政府は老令年金、失業保険、健康保険といった政策を導入した。連邦政府は、さらに、放送などの微妙な分野にも徐々に介入し、また、教育や文化活動を助成した。

🍁 特に中央政府が第二次世界大戦においてフランス系カナダ人の反対をよそに徴兵政策を限定的にはあるが導入したとき以来、ケベック州でこれらの政策に対する批判が激しくなった。戦後、強固なナシヨナリストのモリス・デュプレシー州首相は、同じフランス系カナダ人のルイ・サンローラン連邦政府首相と権限をめぐる一連の長い争いを演じた。デュプレシー首相は、次のような写実的な表現で自分の立場を要約している——「ケベックの立法議会は、われわれ

がどうしても守らなければならない要塞だ。それがあからこそ、われわれは自分たちに適した学校を建て、自分たちの言葉で話し、自分たちの宗教を実践し、またわが住民に適した法律を作ることができるのだ。」

🍁 ケベックが他の州とは異なった州であるという考えは、ケベックがある意味でフランス語系カナダ人の「ネーション・ステート（民族国家）」だという主張を発展させるもとなった。フランス系カナダの文化をケベック州国家と一体視することのような傾向は、ケベックがいわゆる「静かな革命」の時期に入った一九六〇年以後、さらに強まった。ケベックの人々は自分たちの文化が果たして近代技術の影響に打ち勝っていきけるかという懸念を、自分たちの社会の諸

ケベック残存への道

がどうしても守らなければならない要塞だ。それがあからこそ、われわれは自分たちに適した学校を建て、自分たちの言葉で話し、自分たちの宗教を実践し、またわが住民に適した法律を作ることができるのだ。」